

南京航空航天大学

2018 年硕士研究生入学考试初试试题 (A 卷)

科目代码: 624

满分: 150 分

科目名称: 基础日语

注意: ①认真阅读答题纸上的注意事项; ②所有答案必须写在答题纸上, 写在本试题纸或草稿纸上均无效; ③本试题纸须随答题纸一起装入试题袋中交回!

問題一、下記の漢字に振り仮名をつけなさい (1 点×10=10 点)。

- | | |
|---------|----------|
| 1. 紛紛 | 2. 腐臭 |
| 3. 標榜 | 4. 自重 |
| 5. 砂煙 | 6. 潮風 |
| 7. 大甘 | 8. 辛夷 |
| 9. 遮二無二 | 10. 劣悪不快 |

問題二、下記の下線部の片仮名を漢字に書き直しなさい (1 点×10=10 点)。

1. テレビで見た西洋人のチマキを包む手付きは、ぎこちないようにすら見える。
2. 事故が発生して三日も経ったので、遭難者のキュウシュツはもはや絶望とされていた。
3. 狭い道端に野菜だの果物だのを売る露店がメジロオシに並んでいる。
4. これはひとまずの妥協で、これからはホンバンの交渉だ。
5. それをエトクするために、自分の文章を朗読してみることをお進めしたい。
6. これは何も人にチョウシを合わせて言っているのではなく、僕の本音なのだ。
7. 聞いていても面白くもヘンテツもない話だから、途中抜け出して帰った。
8. 断りなしに部屋に入ってくるとは、ムサホウ極まり行為だ。
9. 私の故郷は、東北の岩手県のキタはずれ、青森県との県境に近い小村である。
10. 昔風にはフウガであろうが、現代人たる私たちにははなはだ間が抜けている。

問題三、次の言葉の意味を中国に訳しなさい (1 点×10=10 点)。

1. バイプレーヤー
2. ベビーカー
3. モノクロ
4. からから
5. からがら
6. さばさば
7. 平身低頭
8. 白川夜船
9. 右往左往
10. あるかないか

問題四、次に与えられた言葉から最も適当なものを選んで、下線部に入れて文章を完成しなさい。選択肢の使用は一回のみ、必要な場合正しい活用形にしなさい (2点×10=20点)。

高をくくる、きれいがある、口、とでもいうもの、そわそわ、
かげんする、まだしも、はずみに、じみる、にかざる

1. 同じエンジニアといっても、彼のほうが機械を_____技術がずっとうまいのだ。
2. 死ぬまでベツト生活が続くのなら、いっそのことこの世を去ったほうが_____だ。
3. もう 30 年以上も農村で暮らしてきたので、彼はもうすっかり田舎_____ものに変わってしまった。
4. 親の援助なくしてもこの問題を解決できると_____が、完全に失敗してしまった。
5. 日本に行くなら 4 月_____よ。どこへ行っても桜が咲き乱れているものだ。
6. 転んだ_____財布を落してしまったらしい。
7. その土地土地の「気」_____を吸収して、力をわけてもらっている。
8. 彼女もこういった他人の話は大好きな_____だ。
9. 彼はいい男だが、なんでもおおげさに言う_____。
10. いつものように水槽の中を覗き込むと、妙に_____した魚がいる。

問題五、次に与えられた言葉を使って文を作りなさい (4点×5=20点)。

1. 百も承知
2. ぱっとしない
3. ものを
4. 高が知れた
5. とんだ

問題六、次の文章を読んで後の問に答えなさい (3点×10=30点)。

知魚楽

湯川秀樹

色紙に何か書けとか、額にする字を書けとか頼んでくる人が、跡を絶たない。色紙なら自作の和歌でも済むが、額の場合には文句に困る。このごろ時々「知魚楽」と書いて渡す。すると必ず、どういう意味かと聞かれる。これは『莊子』の第十七編「秋水」の最後の一節からとった文句である。原文の正確な訳は私にはできないが、おおよそ次のような意味だろうと思う。

あるとき、莊子が恵子といっしょに川のほとりを散歩していた。恵子は物知りで、議論が好きな人だった。二人が橋の上に来かかったときに、莊子が言った。「魚が水面に出て、ゆうゆうと泳いでいる。あれが魚の楽しみというものだ。」

すると恵子は、たちまち反論した。①「君は魚じゃない。魚の楽しみが分かるはずないじゃないか。」

莊子が言うには、「君はぼくじゃない。ぼくに魚の楽しみが分からないということが、どうして分かるのか。」

②恵子はここぞと言った。「a ぼくは君でない。だから、b もちろん君のことは分からない。c 君は魚でない。だから d 君には魚の楽しみが分からない。どうだ、ぼくの論法は完全無欠だろう。」

そこで莊子は答えた。「ひとつ、議論の根元にたちもどってみようじゃないか。君がぼ

くに『君にどうして魚の楽しみが分かるか。』と聞いた時には、既に君はぼくに魚の楽しみが分かるかどうかを知っていた。ぼくは川のほとりで魚の楽しみが分かったのだ。」

この話は禅問答に似ているが、実はだいぶ違っている。禅はいつも科学の届かぬところへ話を持ってゆくが、莊子と恵子の問答は、科学の合理性と実証性に、かかわりを持っているという見方もできる。(3)の論法のほうが(4)よりはるかにが、科学の伝統的な立場に近いように思われる。(5)、私自身は科学者の一人であるにもかかわらず、(6)莊子の言わんとするところのほうに、より強く同感したくなるのである。

問1. 下線部①は三段論法と言われる推論形式だが、初めに置くべき前提となる事柄（大前提）が欠けている。補うのに最も適当なものを次から一つ選なさい。

- I. 魚の楽しみは誰にも分からない。
- II. 魚の楽しみは魚しか分からない。
- III. ぼくには魚の楽しみが分かる。
- iv. 君とぼくとは同じ人間ではない。

問2. 下線部②の恵子の言った言葉には、論理的に矛盾しているところがある。どの部分とどの部分との間に矛盾があるか。a～dの記号で答えなさい。

問3. (3) (4) に入れる人名を、それぞれ本文中から抜き出しなさい。

問4. (5) に入れる最も適当な語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- I. つまり
- II. しかし
- III. だから
- iv. なぜなら

問5. 下線部⑥の内容は、結局どのようなことをいっていると考えられるか、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- I. 事物の真相は、分析や実証を通してのみ認識できるということ。
- II. 事物の真相は、他人との議論によってはじめて認識できるということ。
- III. 事物の真相は、言葉や議論を超えたところで自然に体得できるということ。
- iv. 事物の真相は、誰がどのようにしても結局は認識できないということ。

『思考の整理学』の一節

外山滋比古

人間はいつからこんなに夜行性をつよめたのであろうか。もちろん昼間働くのが常態であるが、こと、①知的活動になると、夜ときめてしまう。灯火親しむの侯、などということばは電灯などのない昔から、読書は夜するものという考えがあったことを示している。

そして、いつのまにか、夜の信仰とも言うべきものをつくりあげてしまった。現代の若者も当然のように宵っ張りの朝寝坊になって、勉強は夜でなくてはできないものと、思いこんでいる。朝早く起きるなど言えば、老人くさい、と笑われる始末である。

夜考えることと、朝考えることとは、同じ人間でも、かなり違っているのではないか、ということは何年か前に気づいた。②朝の思想は③夜の思想とはなぜ同じではないのか。考えてみると、おもしろい問題である。夜、寝る前に書いた手紙を、朝、目を覚ましてから、読み返してみると、どうしてこんなことを書いてしまったのか、とわれながら不思議である。

外国で出た手紙の心得を書いた本に、感情的になって書いた手紙は、かならず、一晩そのままにしておいて、翌日、読み返しから投函せよ。一晩たってみると、そのまま出すのがためられることがすくなくない。そういう注意があった。現実的な知恵である。

それに、どうも(④)の頭のほうが、(⑤)の頭よりも、優秀であるらしい。夜、さんざん手古摺って、うまく行かなかった仕事があるとする。これはダメ。明日の朝にしよう、と思う。⑥心のどこかで、「きょうできることをあすに延ばすな」ということわざが頭を掠める。それをおさえて寝てしまう。

朝になって、もう一度、挑んでみる。すると、どうだ。ゆうべはあんなに手におえなかった問題が、するすると片付いてしまうではないか。昨夜のことがまるで夢のようである。

はじめのうちは、そういうことがあっても、偶然だと思っていた。夜の信者だからであろう。やがて、これはおかしいと考えるようになった。偶然にしては同じことがあまりにも多すぎる。遅蒔きながら、朝と夜とでは、同じ人間でありながら、人が違うことを思い知らされたというわけである。

問 1. 下線部①を言い換える最も適切な言葉を、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- I. 夜の信仰
- II. 夜の活動
- III. 夜の思想
- iv. 昼の活動

問 2. 下線部②と下線部③を簡単な言葉で言い換えるとどうなるか、次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- I. 朝考えること、夜考えること
- II. 朝の信仰、夜の信仰
- III. 朝の知恵、夜の知恵
- iv. 朝寝る、夜働く

問 3. (④) と (⑤) に入れる最も適切な言葉を本文中から抜き出さなさい。

問 4. 下線部⑥において筆者の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- I. 軽い興奮
- II. 失意
- III. 自暴自棄
- iv. 自責の念

問 5. 次の文から本文の要旨として最も適切なものはどれか、記号で答えなさい。

- I. 人間の知的活動には夜より朝の方が適している。
- II. 手紙は夜書くよりも朝書く方がいいものが書ける。
- III. 朝と夜とでは、同じ人間でも、かなり違っているのだ。
- iv. 夜、難渋している仕事でも、朝やってみると片付くことがある。

問題七、次の古文を現代日本語に翻訳しなさい (10点×1=15点)

『徒然草』第十段の一節一自然の美

多くの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めずらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは、ながらへ住むべき。又、時のまの煙ともなりなんとぞ、うち見るより思はる。大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

問題八、次の俳句を現代日本語に翻訳しなさい (5点×1=5点)

秋風やむしりたがりし赤い花 (小林一茶『おらが春』)

問題九、次の文章を中国語に翻訳しなさい (10点×1=10点)

連太郎は貧民、労働者、または新平民などの生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてるまでは倦まず弛まず努めるばかりでなく、またそれを読者の前に突きつけて、右からも左からも説き明かして、呑み込めないと思うことは何度繰り返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないというやり方であった。

問題十、作文 (日本語 500 字前後 20 点)

テーマ：文明の発達と人間の暮らし方について